

1 2. トヨタ社の「2000万トン」ポリ乳酸構想

(1) 「2000万トン」ポリ乳酸構想

トヨタ(自動車)社の「ポリ乳酸」の事業について、**将来的には2000万トン供給**し、数千億円規模の収益を上げる事業にするという構想があると「日経バイオ」誌は伝えていた。

(2003年 第29号「日経バイオビジネス」 p.41 2003-9-15 日経BP社)

トヨタ社は、2002年5月**島津製作所**からポリ乳酸の事業を買収・継承し、2003年7月にはサトウキビを原料とする1000トンプラントの建設を開始し、2004年7月稼動予定と新聞は報じていた。

2005年を迎えてトヨタ社の新工場は順調に稼働しているはずである。

2000万トンは、日本のプラスチックの総生産量1350万トンと比べると巨大な数字だが、世界のプラスチック**生産量2億トンの10%**と言う数字だと考えると、トヨタ社の実力から、現実味が増してくる。

21世紀最大の課題である「**地球環境問題**」に真正面から取り組もうというトヨタ社の意欲の表明だと理解出来る。

(2) トヨタ社への期待

人類は、**生分解性プラスチック**なしで、21世紀の「文明」とか、「循環型社会」を構築・維持できるとは、われわれには考えられない。**炭素循環、物質循環、生態系の維持**など、地球環境問題の根幹部分は、生分解性プラスチックを「**手段**」として解消し得るのではないかと考えるからである。

生分解性プラスチックは未だ生まれて15年。普及度合いから言えば赤ん坊のようなものである。さらなる開発・改良が加えられ、如何にして使いやすく、市場が受け入れるものにするか、①**物づくりの側面**と、生分解性の本来の性能を生かすような**社会とインフラ**を如何にして構築するかと言う②**社会的側面**と、その双方からの、生分解性プラスチック普及

に向けた「開発・改良」に負うところは大きい。

だから、われわれは、トヨタ社の車の部品に使えるような第二世代の「ポリ乳酸」の開発を期待したいし、徹底的に「車産業」と、「地球環境問題」と、その双方への「ポリ乳酸」のかわりと、世代交代を推進・強化するような取り組みの推進に期待したいのである。

われわれは、「**ポイ捨て散乱ゴミ**」と「**有機性循環資源**」の「**循環利用**」を目指して、生分解性プラスチック「**グリーンプラ**」の、第二世代、第三世代への開発と普及を目指し、「地球環境問題」の克服に取り組んでゆきたいと思う。